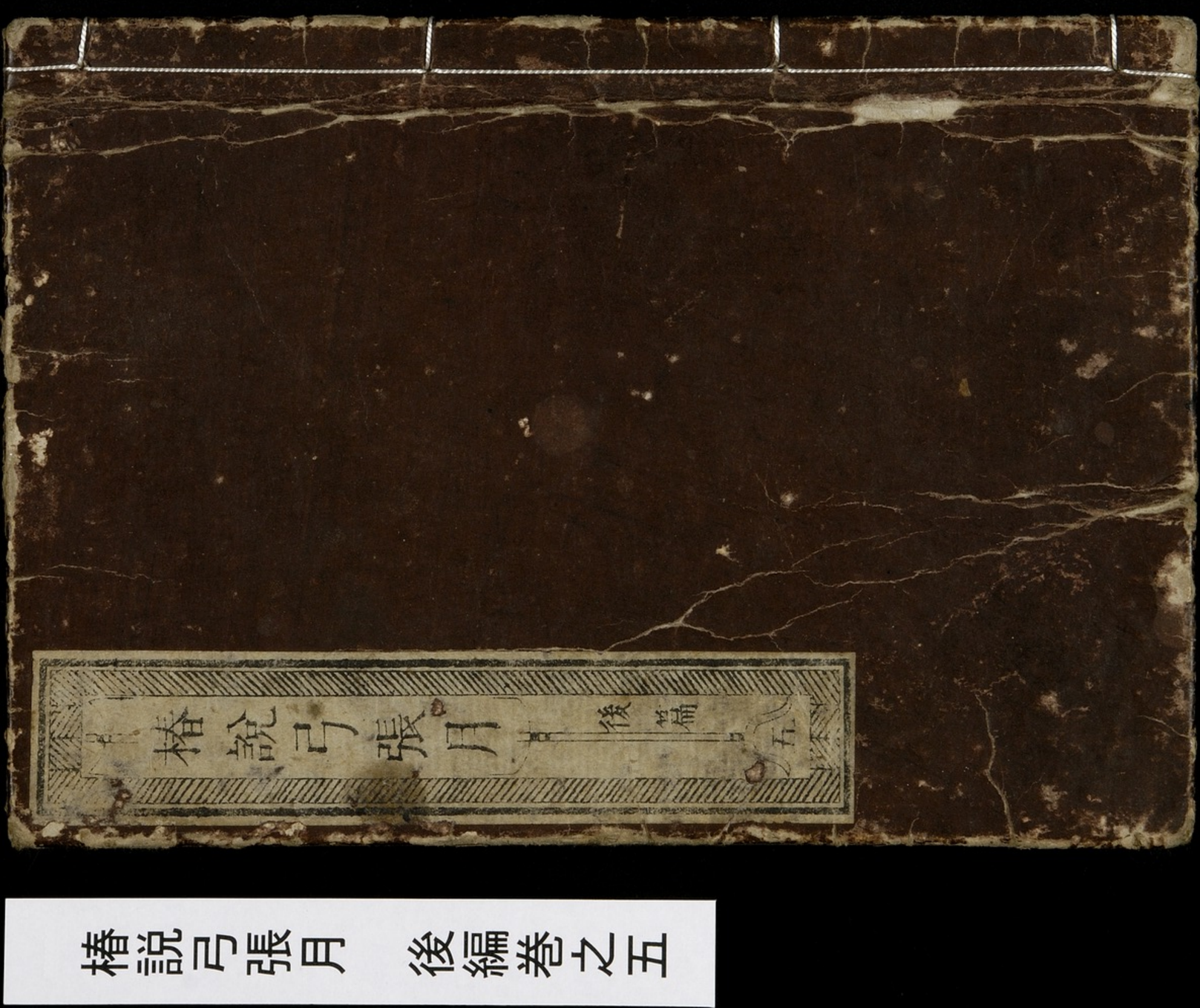


椿說弓張月　後編巻之五

鎮西八郎爲朝外傳　椿說弓張月後篇卷之五

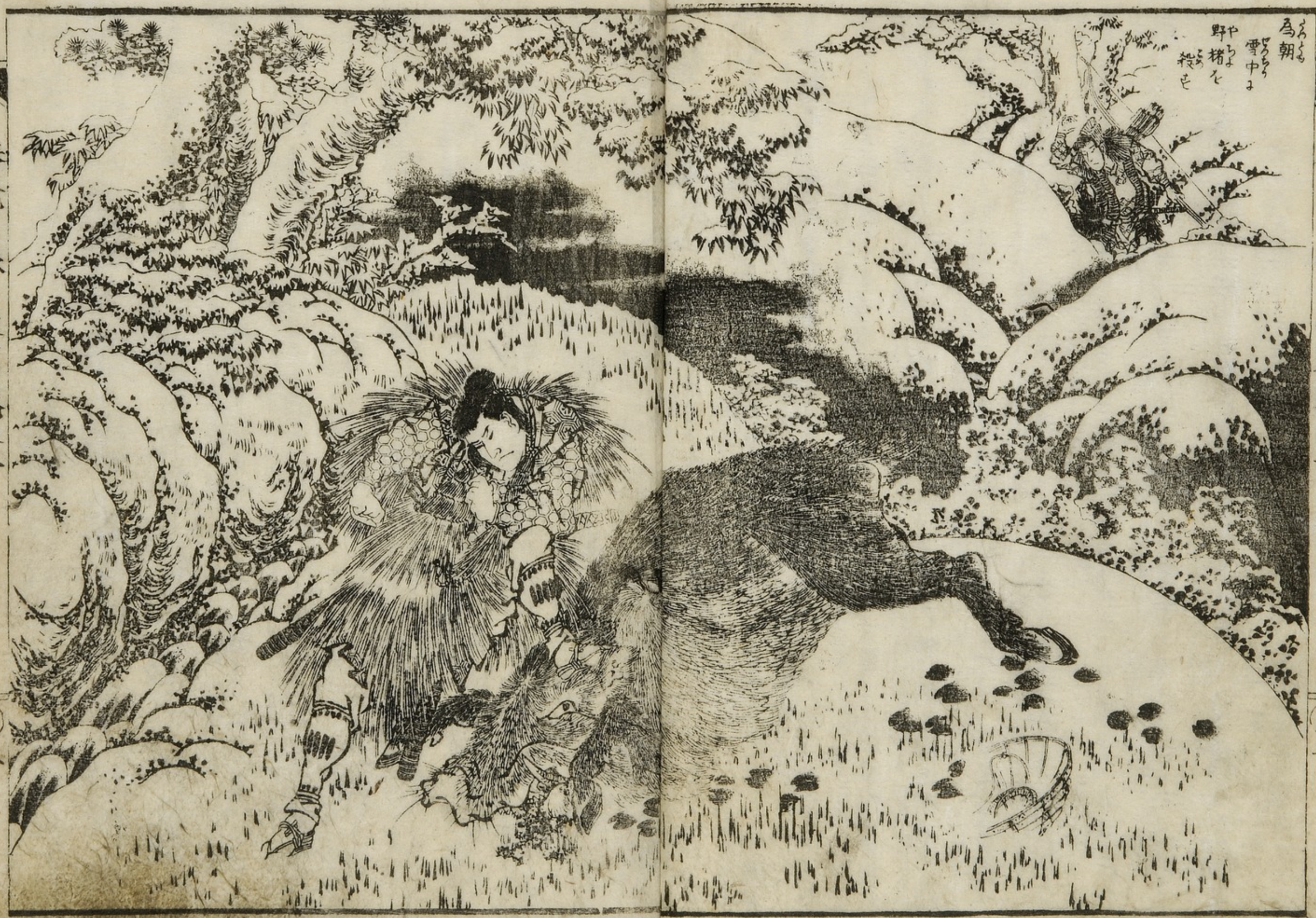
東都　曲亭主人編次

第廿六回

窮士雪中に野猪を殺せ
獵師黑夜に村酒を饋れ

嘉應二年冬十一月下旬。八郎爲朝は。密に讃岐の松山を出て。肥後國へ赴たまふに。船をば曩に逢日の浦に捨おたたまば。人の爲に得ぶまじり。よりて此度は。志渡浦に便船して。十二月の中旬に。肥後國宇土郡。宇土濱に居ぬひけり。このとしうまる。宇土山といふ高峯に登りて。筑紫浮を見ることせば。しらぬ火をよく見ることぞいふまる。しらぬ火とは。仲に焚れあやしき火なり。これは亡妻の白縫姫のるすらひ出られて。慷慨に堪ぬれど。九州は。むかし三年が程に打從へて。菓池原田にも既を出させしど。

よろづ事のみ随ふて。出るにも入るにも。前駈後従のいかめしきに冊き。桂
を料て炊き玉を料て食ひ。富貴両ながら得たりしも。今は一炊の
夢と覚えて。かゝらぬものは海山のみ。かくもなり行くあるまゝに。たゞ
従ふものとては。一條の杖一蓋の笠のみなるぞ。浦ふく風。水鳥の羽音さへ。
幼き殤めるとなりて。君父の示現によりて。この国へ来つれども。何地に行き
何処に至るべくもあらねど。阿蘇の神垣なりて。忠国なる値偶せし前象
もありしかば。此度もまたこゝへ入るはじめなれば。彼神社へ詣てゆく末の事も。
神のしるしにまかせんずれども思ひつ。宇土と託摩の堺なる。緑川をうち渡り。
東の里。萩の縣をよぎりて。益城郡に入りぬるに。日もはや夕ぐれて。天さへ
待陰雪霰と降りきて。寒堪がたし。されどこの辺りは。荒くる郭原
なく。小笹にまじれる枯尾花の隠くれがへ。宿貸べき家もあらざれば。前面に高
く聳るは木原山なりとて人なかにも。この秋白峯なる旅寝からひつる
るをおもひ出て。いとゞあはれなるに。武士の住居さへとも見えぬものを今降る
雪の路なくて。跡なる処正しくも聞ゆるに。彼は須利などにぞあらめ
と。ひとり點頭つゝ走りゆくに雪はますます烈しく降りて面を向べくもあらず。
日もはや暮て。ゆく先もおぼつかなし。折しもあれ野飼の駒の呼ふ声高
く聞えて。いとかしがましく。馬どもの物に駭きさわぎたつるにぞ。何する
のあるらんと怪しく。佇て見まはして立ちたれば。果して雪を蹴たてつゝ。狂ひ
来るものありけり。近くなるまゝに熟と見れば。その大きなる事牛に等しき
野猪の。猟箭を負たるなりけり。さるは野駒の呼ひたるも。これに怕れて
ならん。這何程の事かあらんと。立とゞまりつ。すこし押開きて待ほどに。猪は
為朝を見て大に哮り。小薙刀を押並べたる如くなる尖き牙を噬鳴らし。


為朝
雪中に
野猪を
殺せ

針の筵に等しき毛を逆さまに。鼻嵐高く吹ちらし。驀直にかけんとすると。
為朝閃りと身を反りて。衝と後方に立ちまへば。猪はまさしく荒立て。蹄
を踏えし。やうやくに跡をめぐらして。ゆくてびかけんと逆ひ来るを。為朝
はやく足を揚て。猪の膳下と蹴る。蹴らまくすれし怯むところを。雄子
の嵒に押着つ。足に信して踏にじまゐ祝ふ。さしもに猛き荒猪の忽地
によわり果。苦痛の声とのろともに。ゆくてぞり臥て息絶たり。浩雨に木原山
の麓より。質木の弓を握りのち。猟箭を負ふる獲夫喘く走り来て。雪
あかりに為朝を透し見つ。又猪の斃たるを見えて。且驚き且歎び。近く歩
よりていふやう。おのまつは年来。彼所の深山にとけ入りて。獣を射て捕を生
活とするものなれば。目今この猪を射て。箭は二條負しながら斃まじ。
なほかけんと逆ひ来る。その勢ひ敵しがたく思ひて。しばし遣り過。蹤血

を葉に追ひ来つるに。此身振く打笛なふ事。昔大泊瀬幼武天皇雄略
葛城山に御狩して。みづから荒猪を殺しまひけんも。かくやとおぼし。只恨ぐ
ひとに幡梭姫を見ざるなれ。といつて。只管稱嘆したりしが。如法夜のなす
なれば。その相貌こそしたりと見えたり。声音を聞けばいと弱年なり。そのとき
為朝は。獲夫に封ちて宣ふやう。常言に。獣窮るときは噬人窮るときは
盗むといへり。これ原来猪を殺さに云なく。彼ぶから来たつて斃まてたり。
しかれをかく賞美せられ。これ又自誇するときは。人の労を盗むなり。こが
膂力の剛なるにあらず。此身が猟箭の鋭まてて。と回答なへば。獲夫聞て
まさしく嘆賞し。今宵えからざるも。此身の力を借りて。これは大なる得つたり。
雪もいと深きに。誘なへ。こが家に歇し進らせなんといへば。為称ひ。これは。
通宵走りて。阿蘇へゆくものこ。好意は歎しけまど。しばしも留りがたし

と宣ふを。獵夫ハ其日引とゞめ。とくより阿蘇へハ。十二三里もあるべきに。もし
老馬に鄕なきせゞるにあらずハ。この雪に迷ひなハざらんや。まづこゝに家
に駐りなへ。遠くもあらぬにといふを。為朝ハ篤く欲び坐えながら。留りなふ
氣色なし。獵夫既に留め難て。腰に提る瓢をとり出し。客人いてゆん
とすらば。この酒を喫て。寒さを凌ぎなへ。とハこゝ山めぐりする。今の綱
なれど。半ハこゝちて。猪を殺しなふ酬べし。野の花も却簾きこすあり。
村酒も人を醉するすあり。あれまづ試こそ進らすべし。と信こちて。木
の下に知らるる石の雪を掻拂ひて。為朝に尻をかけさ。その身もほとり
ちかくつひ居て。簑の間より。ぬりたる金碗をとり出し。瓢の酒をなこせ
ふうけて。只一口に喫をかり。只管為朝に勧まゞ。為朝遂に固辞し得
ざ。あかも物同しれ打なれば。雪を殼に嚼て。一碗を頓。叮嚀に獵夫に

謝して。笠の紐を結びそえ。巽を投て走り去り。羊腸たる山ふところ
をゆくなふに。酒の醉ひて逆上て。頻に瞑眩し。一歩ハ高く。一歩ハ低く。
踉く蹌くとして。足の踏とゞ所をしらず。とハ怪くもあるかな。僅一碗の酒
に。かくも醉たるなるよと。呟をつて。強て走らんとしなふに。雪の中に埋
たる。鉤索に足をからまれ。忽地撞と倒れなふ。凡醉たる人。一トたび顛
とれハ。こゝえて起るすべきなど。そのまゝに睡轉て坐しなるを。ほとり
近き穗屋の中より。庚の裘被たる女子。よく見せまして。忙しく走り
出。矢庭に為朝を把て押へ。犇々と縛て。穗屋の真柱に繋ぎ留ぬ。
しかれども為朝ハ。酩酊して泥のごとく。何ものをも覚なハざ。且くして已前
の獵夫。彼猪を列卒縄めて。しかと括り。いと重ぬるに引揚來たり
うば。女子ハ満火燭して出迎。こゝ夫。今宵ハこゝに獲の仍りけるに

とすれども面魂いかめしげなる。旅客を生拘おもつ。彼がいたく辞たるは例の酒を飲して。とてへて来しなるならんといふ。獨夫笑て。うち点臥つ。猪を門に引入れ臥したる為朝を見えたり。その妻に對ていふやう。嚮にこれ。この猪を撃偏さぐりしを。この男が行かりて。輙く打留たり。その為体物の用に立べく見えたれば。能て例の酒を勧め。労せざして猪と人と。両ながら得たり。誘なへ。山の寨に招て。ゆさて。縁由を笑えあぐべきにといへど。女子はかしいくしく。簑を被。笠を戴き。夫婦後方先方にたちて。酔臥たる為朝を宙に扛。山路を登りゆくほどに。いと深くこけ入りつ。とてに鹿垣を結まはして。棟高く建ならべたる。寨ありけり。人迹稀なる深山邊には似げなく。その為体山客の接とも見えず。疑らくは世をしのぶ武士の山蟄して。時をまつにやとおぼし。かくて獨夫夫婦は為朝を壮めてゆきて。衝門二ッぞうりをゐたり。書院めきたる廣庭にこれを引居夫まづ裡に入りて。且くして出来り。その妻にいふやう。尼公もいまだ睡らざるかしませうが。まづうち見ならんと宣するこいうに。おしてて醒たるべきうと。問に。婦答て。雪の中をこまで壮めて来たれば。今はもや醒る比及なるべきれど。尼公只今出ならんとならば。解毒の一剤を用ひなくしといふに。夫げにと諾なひて。懐中より一包の散茶をとり出し。筧の水を柄杓にうけて。件の茶を為朝の口に沃ぎ入たまへば。渇をなふと見えて。殊りなく喫なひね。浩不に。おなじ容なる壮佼亦三四人。燭を乗て縁頬の左右に對坐し。主人の出るをまつほどに。年紀三十ばかりなる美女。長なる黒髪を。髻結際より剪さげ。身には白綾の小袖三ッぞうりを襲て。綿の袈

袈裟を掛。雌手にハ白柄の雄刀を衝たて。雌手にハ水晶の珠数を爪
繰。年齢五十にちかき大男の腹巻して。長ゆかする刀を帯たるを従へ。
屏風の後よりめぐり出て。床几に尻をかけ。生拘束したるハそのものなる歟と
いふ。その声玲瓏として。高からねど。為朝ことに驚き覚て。ふかく呀こ
とハこれハいかにして。かくいひかひなくぞ縛られたる。そもこゝハ何所ぞや。と
潛に彼此を見えかつて。直と呆まて坐せしが。遮莫かぞかりの縛を引
断離とも。容易かりなん。まづ這奴木がせんやうを見ばやとおぼしつ。なかく
まことぶまぞ。既を低て一言もなす問せざ。そのとき主の尼ハ為朝に對ひ。
旅客かなかぐ驚きなひを。全く殺害せんとにあらず。豫て家隷夫婦
のものに命じて。物の用にたつぶくしめる旅客の。林廉をうたるあれが。酒に酔
してこゝに伴しつるなり。恩未密に浅ふべきにあれがなり。されど明白に山に

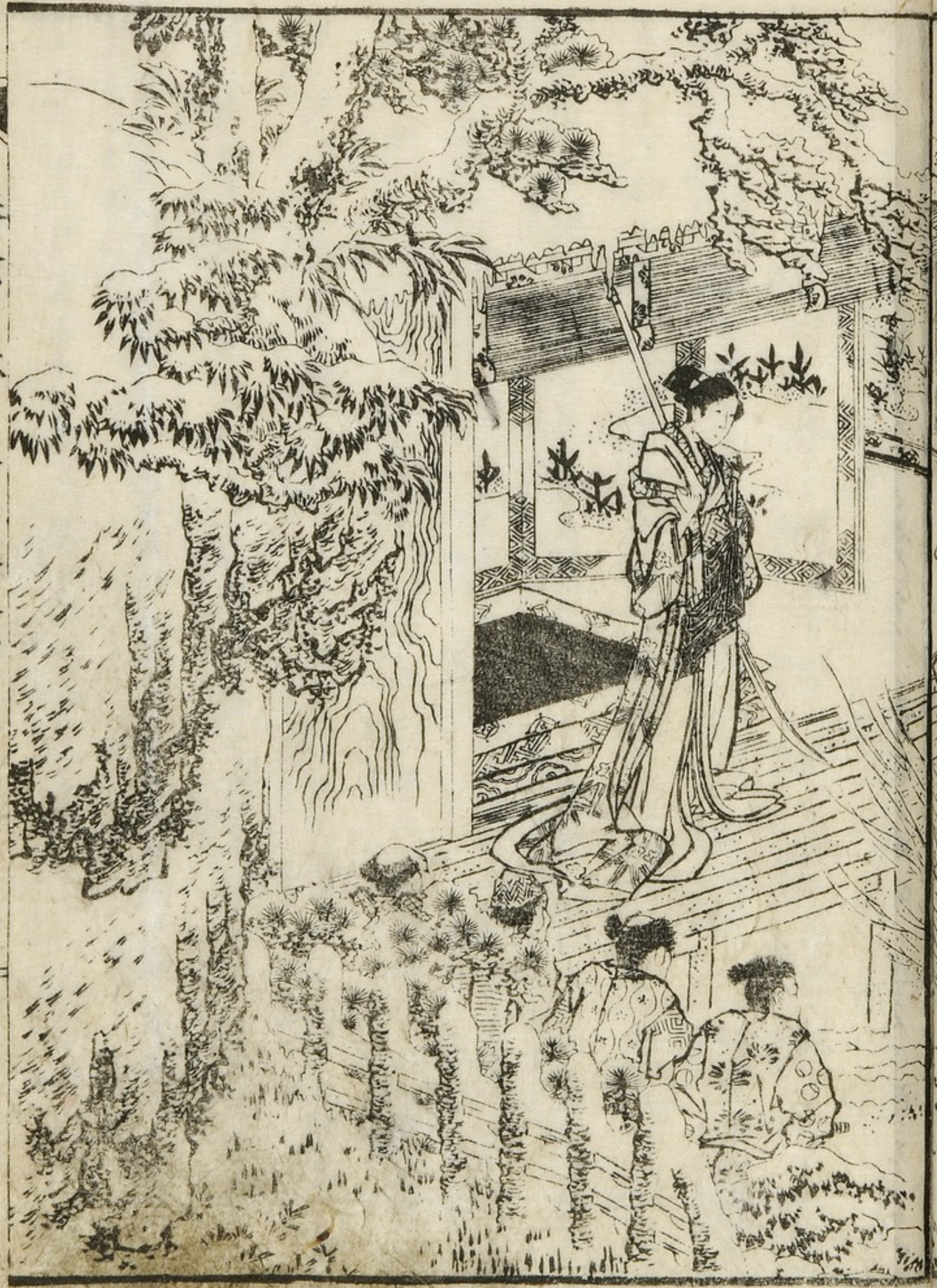
誘引とれハ。その人。これ賊なりんと怕まどひて従ぞ。このゆゑに。瓢に中
子を入まて。一方にハ毒ある酒を藏め。又一方にハさもなきを入れ。彼が
喫とれハ。指をのて瓢の口を塞ぎつ。清なる酒を喫こそ。その人にハ毒
ある酒を喫し。いたく酔して。潛にたゝへ杜めて来て。さて解毒の薬
を飲しつ。既に山にとゞまれもの。二三十人に及べり。もしこがいふ所をうけ引べく
ハ。縛をとれて。縁由を説たらせなん。又兼引じとならば。是非に及ばぞ。
不便ながら。活てハ得ことなきまじれ。幻を定めて回答せよといふ。その
いふとこれ女子にハ似ぞ。いと勇く呼えしかば。為朝まもなく怪こそ。もはぞも
既を擡。熟彼尼を見ゆへば。尼も又そじめて。為朝と面をあはして不審こ。
ほとり近く待りたる大男を見えたり。汝彼男を見よ。近曽大嶋にて自
害たゆへりと呼えたる。曹司にあらず違はぞ。いと怪しくもあるかなといへば件

の男膝をゝめ〳〵燈燭を彼面に向げよ曹司ぉ尚ゝゆとらぶ乃ち
ハ既ゝその人なるを知ゝ。ゐ〳〵やびす惑ひつゝそこの十年おそろさを仍
秋筑紫ゐゝ討死せ。白縫ぉハ又八町礫とゝんるハ僻目ぅ
いろみ為朝を見ゐまさうやと宣ふまゝ。圧も家隷ホも。猛み劇騒がさて
ハれ曹司ぉゝ〳〵ぉのゝうぅ。世ぉ存命なめべうもあゝざ
やまバ。ぅの母疑ひゝ〳〵ぐりる。ぅハ漫ゐうぅ。ぅ物侍なゝ〳〵。且欤び且ひこゝ。
白縫ハ紀平治ゝゐもふ慌忙つ。廣庭ぉ走りりぅぅぅその縛を解
捨ゝ〳〵塵ぅち拂ひ。聽ゝ〳〵上坐ぉ清さそれバ。猶夫もその妻もとの形勢ふ
驚を呆ぉ。面目うべぉえぇぅぅ。

第廿七回

木原山ぉ亡妻亡夫ぉ遇ふ
益城郡ぉ猛卒勇將を得ゝり

當下為朝ハ白縫姫ぉ對ゝ〳〵宣ふやう。ぅハ保元の擾乱ぉ又忠國とゝも
ぉ。討死ゝつとゆえ〳〵ぶ。ゐ〳〵悲ゐゝ〳〵在ぉるぅ。意をねぐひとゝハ。肥後乃
木原山ゐゝ〳〵で。死出の山ぉハぉぉぞや。ぉぶ縁故を説ゐひめくひと宣へバ。白縫
答ゝ〳〵。むゐふぶぉハ宰府ぉゝ〳〵死べうぅし。ぉ又の教訓黙止ぐゝ〳〵。八代と駿の
ゐ婢をねゝ〳〵。城を脱ぉ出ゐふ。ゐてハ
易ハ出もねざひぉ。野風の狼の谷ぶ敵をゐ
討ぉされそぐぅ。その隙ぉ主従かゐゝひ。脱出ぉそれど。侍婢ホハ彼面ぉゝ
推隔ゐぉ。八代も又流矢ぉ命を隕し。
ぇぅねるぉあふゝ。必死を脱ぉ。次の日八九人の結婢ぉ環會ゝ。主従のひとも
よ四國へ押ぇぅぅ。濱岐の水崎ぉ隠ぉ住ひ。琴引の神社みゝ。そかゝぐぞも
武藤太ぉ出あひ。彼ハ曹司を蔑ゝ〳〵。佐渡兵衛尉重貞ぉ生拘ゝ〳〵る



白縫
山塞
不意
良人

よく死。ぬるよう言をもとゞめ。彼武孫太を教へ。忽地寛を雪ぎ。もろ〳〵の仇をもとゞめ。曹司ハ伊豆の大嶋へ謫されぬるとぞ。紀平治を洛外の虚實を窺ひ。かてゝもと多ハ武孫太が首を齎し。婢ホをもとゞめ。茂光を追尚れ曹司を救ひ出ー進らせんをもとゞめ。悚〳〵讃岐を旅立ぬ。千貫の旅餞もとゞめ。追著その夜紀平治が。茂光を狙撃んとするふもとゞめ。主従のうちもふ茂光を夜討ー。頓く曹司を救ひ出ーまゐるよ。誰うちうんそハ贋物もとゞめ。却茂光をそゝのかすを。悚〳〵及ぞ。いでもとゞめ。曹司をぞ。やれ責問よ。そやれ曹司をぞ函をもうえ。径ちう文ぬへ。送り遣ーうと。いふまんよぐもとゞめ。更ま茂光が伏兵を砂挽もとゞめ。主従讃岐へ立ちう。せもとゞめ。新院を盗ー出ーまゐり大坂へ押そうそれ曹司をぞ。直嶋の御所ハ字人の隙なくて。

彼ー〳〵へ近つをまうぐど。それバ世ー揖のうえをもとゞめ。多ハ志渡へ潮を汲ー。見を捨ひ。紀平治ハ山へ入ーう〳〵薪を樵ー。庵を焼。もめくもめして。月日を送り行るよ。侍婢ホも四落八落みなうのもとゞめ宿志を遂るよう。時ま長寛二年八月下旬。ぞ多不思議みも。直嶋の荒磯〳〵の新院ま怒天ーまゐり夫婦が孤忠を賞えめぐ〳〵生ー勧めまゐりしぐど。諸ともへもぞ。汝夫婦が孤忠ハ。ぞもとゞめ後ぞ報ゆべき。今ぞう後。五七年をもとゞめ。かのうぐぞ為れよもあんとうんそれとも夫婦の縁ー。既よ絶るよ和ぐもとバ。婦ぐもび合ーとりくとも。再び離ま。老を偕ー。死を同もとゞめ。ぞ祝ぐ。それ命ありやそうやとうのも契ありとも。時を待ー。面むろ良人ま逢ー。年ぬの憂苦を語り慰るのー〳〵ぐど。幻ぬうるのもぐべきぞと現示ー。生ぐ〳〵。魔鬼ま入ー。悪相を現ー。ぞハ御魂の幻

に。荒磯に出ましまひけん。その次の日に新院ハ崩ましまひしとそ。ひとゝ
怪しく侍れ。かくて彼君の追福も三年が程ハ。志のびくに志渡の浦にて
幽ぞかりする。仏事を営こゝありしが。遂に彼所にも住まびて。故々まれば
紀平治木をおこく。潛に肥後國に立かへり。この木原山に躲家を索侍る
比。むかし宰府にて。つゝ又志國の双錯し。館に火を放復切る。高間四郎
が一子。右郎原鑑といふもの。獵夫となりて。麓にありければ。そうらぞも
名告あひつるに。その志を。又の四郎に芬らざる壯佼あり。又彼所に侍る
女子ハ。磯萩と呼て。年來ゝが身に給るのせし。女の童に侍り。曩に夥の
侍児ハ。幽の外に疎くありゆゑ侍りしかど。彼を幽ざま雄々しくて。忠義
拔群のものなれば。身は立も去らざしてさしまでも從ひ来りしかばこの
磯萩を。高間右郎が妻として。彼木夫婦をば。麓に居らじ。このことりを

なる旅客に。勇く見ゆるあれば。嚮にやけるぞく。賺してとらに誘引し。
幽中の機密を告て。これを相語に。もし兼引ざるとれハ。偏んすを害怕て。
不便あがらしまひ侍り。そのところ。夥の勇士を集合て志のびやうに大嶋
に推渡り。殿を迎とりまゝんとするの外。化るは。志うるに曹司ハ。いぬる
四月下旬。茂光木に攻られて。飯に火を放。自殺しぬと。必えしかば。妻
年の宿望いさづらすとありて。朽をしとも悲しとも。比てしかんやうもあらず。
よしや万里の波濤を隔るとも。顕身の息の内に。天ゆく夜間の月なりでやぞ
あふ日もあらんかとおもひしハそうこの兎にて。けふまで生ぞハかくまでに歎ハせじと
今さらに人をも恨身をも果敢なくて。いふ憤の遣うなく。遮莫工藤茂光
とて夫の仇なれ。せめて彼が首をもて。亡夫を祀り進らせ。亦に自害せんぞや。
とおもひしかば。即髻を剪て。世にあれ志を示し。形ハ女僧に似たれども。

神ハ修羅の街に呻吟。まとく高間磯萩に催促して。身方の勇士を集むるべ。ゆゑ二三十人に及べり。今ハいつまぐの期もべき。翌ハ東へ戦をもとべしとて。紀平治木と。そのるのを示しあはし。あつたら初装を整るに。ひと怪さん。疇昔の夢に。年紀三十にちかた婦。忽然とうらんが枕方に立在。君が遠来恋しとおぼせその人ハ翌の夜ちへ来ぬ。東へ旅たちぬるのハ。やひとぐまりぬへといふ。うが身愛ところに。そもハ身ハ。何地より来ぬひつると問に。彼婦疾せず。うを消せゆうに失ることありへば。夢覚て。枕方をさんくしば。嶋絹に楱搨たる袿の鮮血に染たると。かまくしき髑髏あり。るのの為倅友あるべくせふ程に。天の明るもまたで。紀平治木をよびつどへ。この愛を合さまるに。衆皆せひ惑ふのこゝにて。それうとひふものもなし。かゝるに。曹司。ばかりぐも今齊来ませしるの愛の告に違ハぜ。かく環會をこそ。

とハ併新院の宣ひたじぬひしるのさへ。やひあらされ行ましとて。十年にあまる憂るのの一五一十を告ぬへば。紀平治ハあまりの頼しさに。不覚に落涙し。白縫姫のひひ偏らしぬるを。気彼語り慰まば。る間太郎ハ磯萩とてもに。廣縁に拜伏し。保元のむしハ。僕ゆうやく八九歳なりしかば。曹司を認まらず。物倅なくも縛まりて。罪を猶ゑ不ほ。預くハ寛仁の制度をもて。放しぬへしとゆきにぞ。為朝ハ高間を熟齋して。汝られをもまりや。と宣ひて。懐中より割符を出して見せぬへば。る間太郎ませまさと驚ぬ。とハとの秋。僕白縫姫の代来として。白峯の山墓へ詣しとも。その山にて。旅客に遍与る割符。さてハその時の旅客ハ曹司にて在せし歟。ある面なや。野干玉の闇なりともとゝへ伴ひ進らせなから。面忘まとるとて託ましけまとて。額に汗して後悔さ。為朝かさねてられ

この我白峯あくまで汝よりけらるゝたる日ハ既よ必ず死を究ふれど汝が人
をきるの怜悧よ愛ふ。假よの割符を受おさめがとれぞふ〳〵あふ〳〵
環會ゆうを主従の縁〳〵まるとれのあふうふうんうるゝびもも耻ろ
を賞美〳〵。又白縫紀平治が。手
縄の裏中よおゝゝ往と髑髏を
ゝが法形ふ〳〵宜よゆう。とん疑べく
この髑髏も彼が白骨あるの
雞紀平治ホいさゝゝ高間夫婦も不審ふ〳〵。爺江と宜ふへ。行
人のゆやと問よ為朝答ふ。とれハ大嶋の主管よ三郎を夫忠重一
とゝひ〳〵もの〳〵女児あふ〳〵。その志信ゆうあふ〳〵又よ仰ぎとの十年がるど

これよ給ふせうべ為頼朝雅。嶋君と呼べる子ども三人よぐ産ふろ側室〳〵と
ゝえゝひつ。ふ〳〵大禽あふ〳〵の首尾を審よ物ろう又ろうちゆう鬼が禽へ渡り
ふ。鬼夜又ぐふ。長女がふ。太郎九二郎九のふんさゝゝ為朝爺江鬼夜又が
大嶋あふ〳〵自殺ふう縁由又ろうぐもホ為ふ〳〵。
なる成ろう。夫よ後悔〳〵。直よ嶋君を刺殺〳〵後ゆふ〳〵腹を切らんとそひ
つるふ為朝爺江が逃ゑ鬼長女が親族ふる。四男五郎とふものをふ〳〵。
ぎで免さ〳〵れバ。其ホあふ〳〵自殺ふるの成ろうやく四男五郎を賺〳〵。
本為へ〳〵。長女と二人の子どもふあ逢ぞ〳〵。髄ふ〳〵ホ為ふ〳〵を糟ふる是。
遂よ濱岐へ押渡ふ〳〵。逢日の浦あふ〳〵大宮司季範よ告あひとれふ
ふ〳〵嶋君を尾張の熱田へ却ふ〳〵次の日新院の御墓へホ為ふ〳〵。
羊の孤忠を祈ふ〳〵既よ自害をんとふ〳〵刀を持ふれど猛よ足癈廃れ

忙然たるその中に君父の亡魂幻にあらはれて。外ながら自殺をとゞ免。冬の夾に至らば。肥後へ卦けと宣ひつるゆ。或ハ足利義康が弟黨梁田時員といふもの。密かに大鳴へ使して。朝稚を下野へ迎とりしるゆ。すべてこゝおちもなく。物かたりなふにぞ。紀平治。高間。磯萩ハ。笑るゆ毎に嘆賞し。白縫姫ハ殊さらに。或ハうち泣。或ハ欽び。為朝の純孝。彫江。長女が苦節。鬼夜叉が忠死をいと惜ミ。朝稚鳴君を弟九二郎九の。猛に孤となるが哀悼ミなふに。為朝ハ。又忠國以下。八代末が陣役を哀ミ。野風が死をもて。主にかたりし。志を感激し。むかし琉球まぐ索ゆれて。上皇へ献ずたる鶴の不忠殘にも大鳴へ来つるゆをいひ出つる。これまたハ白縫を世にまれ人とおもひ。白縫ハ又これを死せりと思ひおもひまし。是なん二世の契りなるべしと宣ひつ。夫婦君臣の會話を。庭の白雪ありたえて。長さ冬の夜も明なんとす。

さる程に。高間を前に誘まして。山塞に留りたる勇士末ハ。すべて平家の悪政を疎ミ。為朝の智勇を景慕する。武士の浪人なりかれば。此曹司ハ不思殘にも存命て。ここに来ませしと。大に歓び。紀平治と高間を弟に就て。しとりくに見来る。そのとき白縫ハ。髪を紈。袈裟を解捨て。賀慶の筵をしたる。夫婦主従なくてこゝに。枯たる枝に春の花開。海月の骨にあふこちして。十年あまりの艱難憂苦も。この一會に忘れて。

第廿八回

白鶴瑞を呈して。舜天降誕を
赤心神に禱て。朝稚起程を

次の日。紀平治高間を郎末。為朝にまうしけるハ。身方の勇士。いまだ二三十人に過ぎといへども。君既にここに来ませしかば。百萬騎にも勝るべし。近日夜に紛まして。原田が城を乗とりもつぐ。九州の武士末。豫てもまこの程

ハしりぬ。舊好の鄕士。農民に至るまでぐ。招うぜしてゝ弛來なん。かくて
菊池を攻潰して。肥前把後を畧し。夫々羅六友を攻落して。國司を
追出し。大宰府を根城とせば。九州一舉して定めつべし。しからば官軍
も怕るゝに足らざ。平家も屑ならぐ。君又の爲にハ保元の寃を雪め。自
己の爲にハ。多年の鬱恨を散さに足まり。とゞくしひたちなへうと勸れ
ば爲相答て。汝達がいふごとく。今九州を攻とらんハいと易しさりとても。新院
既に崩ましまひ。重仁親王（崇德の一の宮）出家しまふなれば。誰が爲にか蝸牛の角目
ごちて。國を爭ひ。人を屠り。大平の世を乱さべき平家ハ從來の仇なれども。
道を虞に貸にあらざれいかにしてこれを發ん。只時を待にハしかざ。これも
こが榮利を圖て。其名の軍兵を動し。罪なき民を殺さに忍びざ。と
宣ひける。時に白縫夫のほとりにあり。つゝぐとこれを笑て。こらハ女子乃

可にして。とゞくゆべきにあらねど。菊池原田ハこが又忠國の仇なり。工藤茂
光にて爲頼。彫江の仇なり。もし九州をとらじとならば。船路より伊豆國へ
推渡り。茂光木を發て。東國に旗を揚ならば。彼地ハ源家譜代の家人
ありけり。もし関の八州を打靡ならば。西の九箇國に勝りなん。などくて
是をしも。其名の軍さと宣ふにや。と問に。爲朝かさねて。菊池原田が
忠國を討るハ勅命を稟て。私の遺恨をはらせり。かゝまゝが是公道に
稱ふにあらざや。又茂光が爲朝をねてゝ。しひて。官軍を稟し。爲頼
彫江鬼夜叉木。これが爲に自殺さといへども。これ又茂光が私に征伐
したるにあらぐ。さるにあらて。これ茂光木を拒まぐ。身を束て死をまち
しハ。朝廷を重ざる故に。只憎むべきハ。清盛が暴惡のこ。君を苦め民
を虐。天と人と共に怒る。これ時をまつて。これを討ん。かならざしも

舜天丸
誕生して
白鶴吉瑞を
示す

人情によつて。公道を忘るべからざと。宣ふにぞ。白縫はさらなり。高間八町礫は。為朝の義理分明なるに感伏し。寔にかゝる英雄も。時に遇ぬはざしとて。朝敵と呼ばれぬふことてさるに。月日はこゝが君の為に照らしぬはぬうとて。頻に難息したりけるに。白縫は。又彫江が苦節貞魂の世に稀なるに感嘆し。紀念の袿に髑髏を裹て。祠堂にもさめ。且暮に香華を手向。道高き聖僧に托して。昊場へ葬らばや。とぞひ申ひけるに。ある夜の夢に。人ありて告ていふやう。こゝかが白骨を。叮嚀に葬りぬかんとおぼすなり。いと欲しくは待ましど。なほこゝにありて。人をこまち待るなり。今より五七年が間は。ぞめおかしまへといふ。白縫は覚て後。いよ奇之とし。縁由を為朝に告てまふに。為朝も。又訝ミ。それは誰をか待らん何なりも。彼がいふまゝにして。待させぬと仰せしかば。白縫は件の髑髏を葬らば。なほ祠堂に秘おきけり。かくて詰朝。為朝は。白縫に宣ふやう。これ近曾。この國へ来つるとは。阿蘇の神社へ詣んとて。この山下をゆり。そうらども高間磯萩に導まつて。夫婦再びあふるを待たり。かれが翌は。つとめて阿蘇へ詣て。志を果すべしと宣へば。白縫姫喜びて。阿蘇はこゝかが為に。産砂におはしませど。こゝに山蟄しきは。たえて一トたびも来らざ。この序に。こゝが身をも倶しぬへうしと回答ぬふ。為朝さらばゆるぬへと諾て。紀平治ホ二十余人の勇士を山にとゞめ。高間磯萩を招て。夫婦主従僅に四人。十三里を只一日にいゆきて。その夜は通宵阿蘇の神社に籠つて。次の日。夜をこめて。木原に帰りぬひけり。しかるに白縫は。この月より有身て。次の年の秋の季に。男子出生せ。この児生れぬふとは。丹頂の老鶴。屋の棟にとゞまり。啼こと三声にして。

南を望て飛去ぬ。これいとめでたき祥なれば。衆皆久後なのもし。
とやはざるものもなし。されば為朝は曩に新院の宣ひしじなるを
さへ。やひあはしなひながら。白縫紀平治が外にはいひもしらしなれど。
児の夜を舜天丸と呼て。紀平治をめて。傅き養育しなひつ。元
來この木原山といふは。益城郡に属して。四方は茫々たる郊原なり。
南のかた五家に隣て。白山椴木。奈須の連山波濤のごとく立り。西は
亦八代郡に隣て。川田種山隈川あり。乾のかた蘆北郡を限りて。
水俣袋國見山の外。渺々たる蒼海なり。よりて為朝木原の山中に
躲住なふよしをば。原田林の徒もしらじ。只水俣濱村の漁夫木のこ。
いりにしてしりたりけん。二十里に降る路を。遠しとせざ。をりく苞苴
をおくて木原に來り。舊恩をおもふこと。信ゆかなりしかば。為朝主従は。

深山に住ひて。魚類海藻に乏しからざ。かゝりしかば。斧鑿は刀を揃て
耕し。戈を植て耘り。山畑夥切ひらたて。衣食の料に窮なりける
されば為朝この山に來なひし日より。飛雁辟て。峯上をるらざ。是
勇將の強弓に怕るものの歟。今もなほしりたるをめて。後世木原
山を呼びて雁回山ともいへり。これ天とぶ雁。この山をかんては踰ぜて
うへしがこ又山中に。為朝の寨せし礎殊しり。土俗は為朝の城迹とぞ
いふなる。彼地に抵ぶ人はうなりぞ。ゑるなぶべし。是はさておき。梁田時員は
去年嘉應二年四月下旬。伊豆の下田浦にありて。為朝の音つれを待
に朝稚不思議にも。紙鳶に乗ながら。恙なくて。彼浦へ落なひし
うへ。ふかく歎びて。暗号の狼煙を揚。こりなく朝稚を脊に負つ
夜を日に継て下野へ立うへり。主君足利義康に。為朝の返辞を

一五一十演說し。彼人より贈來されし。璫反の短刀を進らせ。朝稚を誘引、糸りしよし。城中せしかば。戔康聽て對面して。為朝の節義を嘆賞し。且朝稚の恙なくて。ここに來まるを歎び笑え。此度家隷時員を。密に大嶋へ遣して。為朝に消息し。此身を迎とりまるまり。けふよりは戔康が子にておはするかし。と宣へば。朝稚は。そじめて又の慈ふかたるを曉得て。ところにおのひまふせう。かくりせば。親胞兄弟にも身の暇乞さべかりしに。とはたらぎしく只顧に。又の怒の甚しくて。罪なりしまふにこそ。紙鳶に乗せらまして。各もたらぬ浦曲に落かり。こゝりなくも盗賊に。伴ひきらるゝとのゝ心ひしまれ。あま迷惑とはおぼせども。気色にだにあらはさぬ。まづ戔康の好意を謝して。礼儀正しく言行まふ。初に戔康にまさしくその怜悧を稱讃し。次の日老臣を呼びつどへて宣へ

ゆう。こゝ妻は世を早うし。この身も又小動の五十にあまれど嗣べた子なし。たゞるにこれ七年あまりさはろ秋。ちかき山里に狩らしして。賤が家に一夜あかせし日。その家の未通女によばひて。男子を産せしるあり。母は産後に身まかりければ。密に梁田時員に養し。そや七丈になりぬ。さまでがに耻て。汝ホにはたらせざりしが。こゝが血筋とはものは彼が外にまし。よりて彼児を。家嫡と定むべう心ふなりこの事何とかあるべた。と問ぬべば。衆皆大に歎て。僕等。年來稚君の在さねを。歎くこと久し。これ彩ふに稀なる僥倖なり。そくゝ心ひこしまへかし。と慈しかば。戔康ゆがて吉日をトミ。朝稚家嫡の披露をしつ。家隷ホに酒食をのふにぞ。おのゝ歎を述て。朝稚に拜謁せう。この所に朝稚を。為朝の子なりとは。たるものこそてなりかな。浩然に

義康ハ
中ヨリ
養れて
朝稚
家臣ホク
礼を受

その比為朝ハ茂光が逸奏によつて。夥の官軍をさし向らるゝ。罪の
脱るゝことゝなれを知て。妻子を刺殺し。館に火を放て。自滅し
ぬるよし。都鄙の風聞かくまでありしかば。朝稚大に哀しくて。密
に父の喪に引こもり。且て人に見えぬハど。義康ハ。この事に。朝稚を
ひよく愛慈し。忌ども果て後。弓馬の家業ハいふもさらなり。
書を讀し。手習ひさしぬるに。その才世の童に勝れ。しかも養父
に仕て孝行等閑なりけれ。さる程に光陰代謝て。安元二年に
ありつ。朝稚時に十三才物のことゝもしる間に。まもなく父母の枉死を
哀悼。その最期にあハざりしを。いと遺憾おぼせしかば。竊に祈を。
梁田に告。彼を賜て。足利なる八幡の社に糸籠し。せめて假寐の夢に
ありとも。実父実母にあハしぬべと禱つ。しばし目睡む夢の中に。鬢
つゝ結たる童子忽然とあらハれ。朝稚に對て。いふ事。大神の宿あり。
この幣を路の傍に立て指南とし。頭の向たるに曷ねゆかば。父にこそ
あひがたけれ。母にハかならずあらん。速にしひたちいへと說示し。件
の幣を遍とうえて。朝稚猛に驚き覺。彼此を見えうぬべハ幣ハ面あたり
膝の上にありけり。いと不思議にも覺えれば。時員を呼びさまして。夢見し
事を咲えぬに。時員が見たる夢も。つゆ違ハどとまうす。かくハ朝稚信
心いやましに。ふかく神明の冥助を感激し。その幣を携て館にぬり。
養父に縁由を物がたり。頼くハしばし才の暇をたべと。寛ふにぞ。義康
ハ彼幣を見て。且おそれて。且なるに。此才なほ年なれど。至孝に
よつてかく新示現を蒙ぬべり。しかれども。この事公ごちてハ便なりけん。
これハしらず貞にてあるべきに。世にハ病気と披露し。時員只一人を

椿說弓張月後篇卷之五

容舟
松[illegible]